夢

Ａブロックにエントリーされた全８作品を公開します。

覇者となったのは果たして誰？？

http://www.columnland.net/　にてごらんください。

A-1

光

夢を見た。

暗いのに温かい。不安定なのに落ち着く。加速度は増すばかりなのについ身をゆだねてしまう。この状態が心地よい。きっとこのまま落ちていけば、僕はもっと楽になれる。このままどこまでも、どこまでも落ちていきたい……。

でもなにか冷たいものが僕をどきどきさせる。首筋にこんにゃくをつけられた時のようなゾクっとした感覚。上を見る。ぼんやりとした青白い光がいくつも浮かんでいる。指先で触れれば静かに壊れてしまいそうな繊細な光。その光のいくつかが、僕の体をかすめていた。まるで僕を制止するかのように。

気がつくと、光の数はどんどん増えていって、僕の体を包み始めていた。冷たい。いやだ。僕の居場所を奪わないで。いやだ。いやだ。やだ。やだ。やだ……。

小鳥のさえずり。春の穏やかな日差し。目を開く。床がしっかりと僕を重力から支えてくれている。そうだ、僕は落ちていっちゃダメなんだ。夢は暖かくて優しい。でも、そこに閉じこもっていたらなにも見えてこない。僕の居場所は下にはない。あの刺激的で雄大な春の青空へ向かっていこう。そこにしかない光がきっとあるはずだから。

自問―追伸・転起承結とかどうですか―

子どもの頃より星が見えなくなった気がする。大気汚染とかいろいろ言われはしますが、星が見えなくなった大部分の理由は私の視力が低下したからです。昔の百分の一くらいになっている。それでも、星がなくなったわけではない。きっとそこにあるのでしょう。

――「将来の夢は？」と子どもたちにインタビューするＴＶ番組を一度は見たことがあるのではないだろうか。

「さっかーせんしゅー」

「おいしゃさん！」

そのときの子どもたちの顔は、とても楽しそうだ。しかし、そのシーンを見ていると私はなんだか、恥ずかしいような不思議な気分に襲われる。恐らく、その中心にあるのは次の自問である。

「今の私に、こんなふうに夢を語ることができるだろうか」

もちろん、ややもすれば次の日には「おいしゃさん」が「うちゅうひこうし」に変わっているような子どもたちの夢と単純に比較は出来ないとは思う。しかし、本来夢というものは、それ程に可塑的で移り変わってしまうものだったのである。

そう思うと、私の夢というものはすっかり固まってしまったような気もする。少なくとも大リーガーを見て「凄いな」とは思っても「なりたいな」とは思わない。なんだか寂しい気がするのは気のせいだろうか・・・。

子どもの頃に在った無限の星は、昔ほどたくさんは見えなくなっている。ある意味「大人になった」と言えるのかもしれない。しかし、もっと多くの星が見てみたい、そんな「子ども心」を失いたくはない。

夜空に星三つ

冷たく鋭いはずの吹雪の中、小高い丘に登り、街の広場を見つめる二人の影がある。

今日は今年最後の日、そこでは白月祭という新年を迎えるための祭りが行われようとしていた。昔から続くその行事では、前日の空詠祭で選ばれたこの島の代表が新年を祝うための演奏を行う。

街の熱気のせいか、いつもは冷たい雪も優しく感じられる。

「あ、願い星。」

広場を眺めていた少女がふと空を見上げて、はしゃぐように口ずさむ。隣の少年もつられて視線を空へと向ける。彼の視界の端にも星が一筋舞った。『願い星』、人の願いが空へと届いたときに流れる。島の言い伝えではそういわれていた。

「本当だ。」

二人は一瞬微笑みあった後、視線を広場へと戻した。

白月祭は流星群の時期と重なるらしく、最後の演奏は数多くの流れ星に彩られる。雪が降り積もりながらも夜空は晴れ渡り、星が流れる。不可解でしかないこの状況のせいだろうか、毎年この日は島中が幻想的な雰囲気に包まれる。

そして、その星が最終演奏の指揮棒を上げさせる。曲はピアニシモから徐々にクレッシェンドをかけるようにして、始まった。しっかりとしたグランディオーソが空気を支配する。やがて彼らの耳まで音が届く。

「ねぇ、次の白月祭だけど、三人で挑戦しない？」

演奏が終わり、余韻に浸るような静けさが新年の祝福に消されたころ、少女が口を開いた。それを聞いた少年は今回ここに来れなかったもう一人の少年のことを思い浮かべる。

「どうかな？」

少女はもう一度問いかけた。

彼らが夢へと帆を進めようとする以上、もうすぐ島を出てバラバラになってしまう。それなら、最後に何かをやろうという提案だった。

「あいつと三人で、てことか？…それもいいかもな。」

少年はうなづきながら、笑って応えた。

「うん。」

少女の微笑みも重なる。空にはまだ星が降り注いでいた。

「あいつにも聞いてみないとな。」

少年のその言葉とともに二人は丘を下りて行った。

彼らは夢のために島を出ていく。でも、その前に叶えようとしている夢だった。

そんな彼らの思いを知ってか知らずか、白月祭には一つの伝説があった。共にその舞台を演じた者は必ず再び巡り逢う日が訪れると…。

父子（おやこ）

「お父さん、何変なポーズしてるの？怪しい宗教にでもはまった？」

「いや。自分の見たい夢を狙うために精神統一をしているんだ。日頃の欲求や願望が夢にあらわれる事があるらしいからね。」

「ふ～ん。でも世の中には、先天的に夢を思い通りに操作できるLucid dreamerという人もいるらしいよ。」

「何！近頃はそんな世界まで格差が広がっているのか。おれの努力は一体・・・。」

「でもたしかに、本当に夢が思い通りになったらすごいかもね。だって、（夢の中だけど）あんなことやこんなこともできるんだよ。ちょっと想像してみて・・・」

「・・・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・・！」

「男の夢（ロマン）だな。」

「ぼくもLucid dreamerになりたいなぁ。」

林立するビルのガラス窓が、午後の太陽の光を受けて黒光りしていた。その駅は朝と夕方のひどい喧騒のあいだの、ひと時の休息をとっているようであった。乾いた空気の中に電車の到着を知らせるアナウンスが響き、白地にシャープなラインの入った特急列車が音もなくホームに滑りこむ。

列車を降りて急ぎ足で出口へと過ぎていく黒服の流れのうしろに、彼の姿があった。彼は黒服の進む方向には従わずに、ホームにあるパステルカラーのベンチに腰を下ろし、軽く息をついた。彼の足先を革靴がかすめたが、彼は気づかない。均一に流れる時間の中の、切り離された小さな空間。

いつからだっただろうか。気づけば彼は、都会に魅せられていた。別に故郷が嫌いだったわけではない。青い空と山と水がすべてを覆う故郷を、彼は気に入っていた。しかしそれ以上に彼は、無機的な空間に身体を晒し、人々の雑踏に感覚を溶かしたかった。それらへの想像は、彼の神経を刺激し、彼を都会へと駆り立てた。人は自分の知らない世界に夢を重ねるものだろ？

彼は空を見上げたが、青空はビルの陰にかくれて見えない。屋根の合間から太陽の光が差し込み、回送待ちの特急列車の真っ白いボディを静かに照りつけていた。カラスが一羽、彼を見つめている。

故郷を出ようと思った。高校では勉学のかたわらで、ひたすらバイトに励んだ。付き合いの悪いやつと言われたが、気にならなかった。両親の反対を押し切って、遠く離れた都心の大学を受験した。お前には無理だと言われたが、諦めなかった。どうしてそんなに街に行きたいんだ？どうしてこんなに街に憧れているんだ？そんなことはどうでもよかった。ただ、漠然とした思いが彼を都会へと突き動かしていた。不安も迷いもためらいもない。合格通知を受け取ると、すぐに切符を取って列車に飛び乗った。何も考えられなかった。列車は加速した。この先に何かあると信じていた。求めるものがあると信じていた。信じて疑わなかった。

*

ホームを乾いた風が吹き抜け、カラスが羽音を立てて飛び立った。彼はしばらく座っていたが、ふと立ち上がると、やがて誰もいなくなったホームを出口の方へと消えていった。白い列車は、もうそこにはなかった。

― 宙ぶらりんの夢 ―

状況において変動する意思の行方

さて今日会社で首になった
これから一体どうしよう
最後に一発一花さかせと
部長のモミアゲちぎって投げた
夢　夢　これは夢

三日前から公園で
ベンチに座って脱力感
小学生にも馬鹿にされ
本気で後追うNO　JOB男
夢　夢　これは夢　　（自転車で逃げるのはずるいよね…）

結局最後はヤケ酒だ
飲んで喚いて家族に殴られ
こんなじゃ駄目ってわかってんのに
妻の（ボブ）サップは止められない
夢　夢　これは夢

妻と子供は出て行った
ペットのハッピーも出て行った
次いでに俺も出て行った
端的言うとタダ夜逃げ
夢　夢　これは夢　　（どこ行こうか…NAVITIME!!）

必ずBIGになってやる
そう言い上京した男
そのナレノハテが今の俺
結局実家に保護求める
sorry　sorry　my　father　sorry

…出家でもしようかな

（了）

夢製造者

下町に夢製造者が住んでいるというので、インタビューをしに行く事にした。

その人物は人々の持つ“夢”を、その名の通り現実として製造し、叶えるのだという。

製造者の仕事場は、小さな個人経営の町工場のような所だった。ごめんくださいと声をかけ、中に入るとそこには作業着姿の老齢の男性が一人佇んでいた。

「あなたが夢製造者ですか？」

インタビューをしに来たのだと言うと、彼はわずかに目を細め、何かを思い出そうとする顔付きになった。

「どうかされましたか？」

「いえ、何でもありません。何分にも、注文以外で尋ねて来る人が少ないものですから」

彼は入れ歯の人間が良くそうするように口を少しもごもごと動かすと、まずは案内しましょうと言って歩き出した。

「とは言っても大して見るものもありませんが。これが、仕上げ前の夢です」

彼が連れて来た場所には、製造工場にあるようなベルトコンベアーがあり、その上を鈍い銀色の球体が、列を成して動いていた。

「意外と小さいものでしょう」

彼がその流れる列からひょいとつまみ取って、私に手渡したその球は、両の手になんなく収まる程度の大きさだった。私は、こんなものが夢なのかと訝しく思った。手触りが少し妙で弾力性さえ感じられる事を除けば、見た目は至って普通の、わざと光沢を削って鈍く光らせた金属球にしか見えない。

「本当にこれが夢なんですか？」

私の声に疑いの色を読み取ったのか、彼は苦笑を洩らした。

「皆さんそうおっしゃいます。ですが確かにこれは私の製造した夢―いえ正確には、実現する一歩手前の夢、です」

「と言いますと？」

「これを受け取れば、すぐにその夢が叶うと思いますか？」

「違うんですか？」

「例えばプロ野球選手になりたいという夢を持った少年がいるとして、私に夢の実現―つまり製造を依頼したとしましょう。少年は出来上がった夢を受け取ってから、毎朝欠かさず素振りの練習をし、小学校から帰って来ると家で友達とゲームをするのではなく、キャッチボールをしに行くようになる…。そして長年の努力の結果甲子園に出場し、プロ野球選手になる事が出来るという訳です。つまりこの夢は元々の夢をあくまで自然な形で実現させる。言わば実現の為の手助けをしているようなものなのです」

けれど今私はその夢を手にしているけれども、何も起こらない。

「これは私が注文を受けた人の為に造ったものですから、その人にしか効かないんですよ。そろそろ移動しましょう」

彼は夢を流れの中に無造作に戻すと、夢製造の機械の間をすり抜け、その過程を説明しながら応接間へと向かった。

出されたお茶を飲みながら、私は一つ気になっていた事を彼に聞いてみた。

「どうやってあなたは夢製造者になったんですか？」

「なに、簡単な事ですよ。私は私の“人々の夢を叶える”という夢を叶えてもらったのですよ」

確かに、と私は納得した。

「ただ一つ、困った事がありまして…」

私が先を促すと、彼は憂いを帯びた口調で言った。

「ご覧の通り、私ももう年寄りですからこれから先、そう長い間この仕事を続けていく事は出来ないでしょう。後十年持つか持たないか…。ですが私がこのまま死んでしまうと、夢製造者は世界に一人もいなくなってしまいます。なので誰か、かつての私と同じような夢を持っている方を探しているのですが、なかなか見付からず…」

要するに後継者不足という訳だなと、私は思った。このご時世だからそういった人間に恵まれないのも無理がない。

「広告を出したらどうでしょう」

そう言ってはみたのだが、彼はうつむいた。

「それも考えましたが、費用の問題で断念しました。残るはどこかの雑誌などで取り上げてもらうことぐらいで……」

そこで彼―夢製造者の老人は、チラリと私の方を見た。

「数年前の話ですが、夢製造者を継いでくれる方が現れるよう、自分の為に夢を造った記憶があります」

そうか。それで私は出張がてら、ここにインタビューしに来ようと突然思い立った訳だ。

夢で逢いたい

君が目を覚まさなくなったあの日から
私の夢の中にはいつも君がいる

真っ暗な暗闇の中で
私に優しく微笑みかけてくれる

夢の中での君は
とても優しい目をしていて
潰れてしまいそうな私の心を
暖かく包み込んでくれる

君はどんな夢を見ているんだい
君の夢の中に私はいるかい

せめて君の夢の中では
君の隣で笑っていたいな

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	光	2 pt	7 位	0 sp
		夢は無へと溶けてゆくもの、人の生はその対極、というように、通常の甘やかな夢とは逆の発想で組み立てたところが秀逸です。影を濃く引くがゆえに、いっそう明るさが際立つ。いつまでも心に揺らめきを残しそうな今週の表紙作品です。 イチオシフレーズ：「静かに壊れてしまいそうな繊細な光」		
A02	自問	25 pt	1 位	1 sp
		星にたとえた導入部の巧さが光ります。可塑的vs固まり、という字句で説明した構成の工夫もGOOD!　ただまとめ３行がありきたりだったか。 そう華やかな作品でもないな、と思っていたのですが、等身大の感懐がさくっとヒットしての首位、おめでとう！ 特別賞：べすと賞		
A03	夜空に星三つ	0 pt	8 位	0 sp
		白月祭に空詠祭、きれいなタームでいきなり読者の心を異次元にさらいます。ふぁんたすてぃっく！ 「あいつ」の存在が必要なのかがギモンだったのですが、どうでしょう。ふたりっきりのロマンティックな夢のほうが、この白いピュアな舞台には似合うのでは。		
A04	父子	12 pt	3 位	8 sp
		まさに話題作！　コント風の軽さが身上。 情景描写が全くないので、父子の姿を好きなように想像できるのも楽しさ倍増です。　私はカニの父子を想像したのですが、みなさまは？ 特別賞：班長特別賞/勇気あるで賞/藤原賞/男の夢で賞/妄想賞/タイトル賞/ロマン賞/やってしまった賞　と８つもget!! イチオシフレーズ：「男の夢(ロマン）だな。」×７　「ぼくもLucid Dreamerになりたいなあ」　「・・・・・！」 「ちょっと想像してみて・・・」で、イチオシフレーズ大賞も受賞です。しかししかし、「男の夢だな。」が７票もカクトクだなんて、Aブロックのみなさまの好みは(以下略)		
A05	宙ぶらりんの夢	11 pt	5 位	1 sp
		故郷を出て、でもまだ夢を追う途上。 駅という舞台設定が、その宙ぶらりん感をうまく演出していると読みました。彼の今の気持ちが敢えて書かれないのも、いろんな解釈ができそうです。 特別賞：田舎賞		
A06	状況において変動する意思の行方	12 pt	3 位	2 sp
		いきなり「もみあげ」で、つかみOK。追いつめられた状況を自嘲とともにお届け。 ドン底状況なのに、むしろ、ここまで落ちたからこそ漂ってくるユーモアがリズムよく入ってきます。 特別賞：もみあげ賞/A13賞 イチオシフレーズ：「部長のモミアゲちぎって投げた」「出家でもしようかな」「NO JOB男」「sorry my father」		
A07	夢製造者	22 pt	2 位	2 sp
		あざやかに叶うのではなく、渋く、だんだんに叶うという夢の設定が、町工場老人というカタチときれいにシンクロして、まとまりのよいショートストーリーになりました。 初めは傍観者のつもりだった「私」がいきなり渦中に巻き込まれるラストに拍手。 特別賞：世にも奇妙な物語で賞/長かったで賞		
		6 pt	6 位	1 sp

A08	夢で逢いたい	喪ってしまったあのひとを思う。決して届かぬ一方通行の思い。ありきたりの悲しみに溺れることなく、「笑う」とまとめたラストが、よけいせつなく心にしみます。 飾りすぎない言葉のつよさ、届いたでしょうか。 特別賞：悲しいで賞

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
B01	夢というもの	0 pt	7 位	0 sp
		日常と非日常。現実と夢。鍵ひとつが分水嶺になる合わせ鏡。その向こう側の、とらえがたい茫漠とした恐怖のかたちをすぽりとつかまえて、ダイレクトに触感に訴えてくるような表紙作品でした。		
B02	夢	27 pt	2 位	0 sp
		たしかにね、小さくなってくよね、とＡ－２と同じ論点ながら、これ以上は小さくならないぞ、という決意が親しみやすい口調で語りかけられて、共感力大でした。 イチオシフレーズ：「おまえの夢は？」×２		
B03	将来の夢について	0 pt	7 位	0 sp
		小さな記入欄から広がる思いをさらりと吐露。その飾り気のなさで、これも共感力大。特に「うさぎ」！ イチオシフレーズ：「うさぎ」「今は夢＝目標でも構わない」		
B04	冥王星の夢	28 pt	1 位	4 sp
		わあ、うまい!! ラストのひとことで、すべての伏線がきれいに結ばれて、何だか涙ぐんでしまうくらい、せつなさがはじけます。一票差の接戦を制しての首位、おめでとう！ 特別賞：オチ賞×２　ぶっとび賞　タイトル賞 イチオシフレーズ：「冥王星の夢」		
B05	いつかあなたに辿り着くまで	8 pt	5 位	0 sp
		好きな人に逢える丘。ロマンティックな夕景から爽やかな朝の決意へと場面転換のうまさが叙情を盛り立てて、ベタだけどしんみり。 特別賞：努力賞		
B06	友達	10 pt	4 位	2 sp
		ふたりはともだち、三角関係。レイアウトの工夫で天と地ほど差のある人間関係をくっきり見せてワザあり――と読んだのに作者さんの解説を聞いて唖然。上は夢、下は現実、ということなのだそうで。B1班は「メビウス」説（終わりからまた始めに戻る）まで出していたのにっ。 特別賞：メビウスで賞/構成賞/技能賞 イチオシフレーズ：「俺に彼女が出来た」		
B07	夢は	2 pt	6 位	4 sp
		レイアウト勝負が続きます。こちらはドリイムと変換したところがヒットでした。 まあ、あまりこの路線ばかりでは文章力向上にならないけれど、息抜き箸休め、もしくは表紙作品を狙う方はどうぞ。 特別賞：めんどくさかったで賞？/俺らは好きで賞/B8賞/インパクト賞 イチオシフレーズ：「ドうにかこうにか」「ドリィム叶えたい」×２ 「叶えたい」　「ドリィム」　で、イチオシフレーズ大賞受賞です。		
B08	ユメクイ	15 pt	3 位	2 sp
		一人称の語りのおかげで、バク君の人（？）格が伝わってきて、友達気分で読めます。気のいいノンキなやつ、という感じでしょうか。穏やかな読後感で、今週の読み納めでした。 特別賞：いい夢見せてもらったで賞/特別賞/バク賞 イチオシフレーズ：「ごちそうさまでした。」×３　「人の不幸は……」		